

# 通盛

井阿弥作

季は	地は	ツレ	シテ	ワキ	後	ツレ	シテ	ワキ	前
秋	阿波	小宰相	平通盛	前に同じ		老女	老翁	旅僧	

「是は阿波の鳴門に一夏を送る僧にて候。さても此浦は平家の一門はて給ひたる所なれば痛はしく存じ。毎夜此磯辺に出でゝ御経を読み奉り候。唯今も出でゝ弔ひ申さばやと思ひ候。

歌  
「磯山に。暫し岩根の待つ程に。く。誰が夜舟とは白波に。楫音ばかり鳴門の。浦静かなる今宵かな。  
な。く。

ツレサシ 「すは遠山寺の鐘の声。此磯近く聞え候。

シテ 「入相ござめれ急が給へ。

ツレ 「程なく暮るゝ日の数かな。

シテ 「昨日過ぎ。

ツレ 「今日と暮れ。

シテ 「明日またかくこそ有るべけれ。

ツレ 「されども老に頼まぬは。

シテ 「身の行末の日数なり。

二人一声 「いつまで世をばわたづみの。あまりに隙も波小舟。

ツレ 「何を頼みに老の身の。

シテ 「命の為めに。

二人 「使ふべき。

地 「憂きながら。心の少し慰むは。く。月の出汐の  
海士小舟。さも面白き浦の秋の氣色かな。所は夕  
浪の。鳴門の沖に雲つゞく。淡路の島や離れ得ぬ。

浮世の業ぞ悲しき。く。

シテサシ 「暗濤月を埋んで清光なし。

ツレ 「舟に焚く海士の篝火更け過ぎて。

二人 「苦よりくゞる夜の雨の。蘆間に通ふ風ならでは。  
音する物も波枕に。夢か現か御経の声の。嵐につ  
れて聞ゆるぞや。楫音を静め唐櫓を抑へて。聴聞

せばやと思ひ候。

ワキ 「誰そや此鳴門の沖に音するは。

シテ 「泊り定めぬ海士の釣舟候ふよ。

ワキ 「さもあらば思ふ子細有り。此磯近く寄せ給へ。

シテ  
「仰せに隨ひさし寄せ見れば。

ワキ  
「二人の僧は巖の上。

シテ  
「漁の舟は岸の陰。

ワキ  
「蘆火の影を仮初に。御経を開き読誦する。

シテ  
「有難や漁する。業は蘆火と思ひしに。

ワキ  
「善き灯に。

シテ  
「鳴門の海の。

二人  
「弘誓深如海。歴劫不思議の奇縁によりて。五十展

転の隨喜功德品。

下歌  
「實に有難や此經の。面ぞ闇き浦風も。蘆火の影を  
吹き立てゝ。聴聞するぞ有難き。

上歌  
「龍女變成と聞く時は。く。姥も頼もしや。祖  
父はいふに及ばず。願ひも三つの車の。蘆火は清  
く明かすべし。猶々御經遊ばせ。く。

ワキ詞  
「あら嬉しや候。火の光りにて心静かに御經を読み  
奉りて候。先々此浦は。平家の一門果て給ひたる

所なれば。毎夜此磯辺に出で、御経を読み奉り候。取り分き如何なる人此浦にて果て給ひて候ふぞ。委しく御物語り候へ。

シテ詞  
「仰せの如く或は討たれ。又は海にも沈み給ひて候。中にも小宰相の局こそ。や。諸共に御物語り候へ。

ツレ  
「さる程に平家の一門。馬上を改め。海士の小船に乗り移り。月に棹さす時もあり。

シテサシ  
「こゝだにも都の遠き須磨の浦。

二人  
「思はぬ敵に落されて。實に名を惜しむ武士の。磯馴盧島や淡路瀬。阿波の鳴門に着きにけり。

ツレ  
「さる程に小宰相の局乳母を近づけ。

二人  
「如何に何とか思ふ。我頼もしき人々は都に留まり。

通盛は討たれぬ。誰を頼みてながらふべき。此海に沈まんとて。主従泣くく手を取り組み舟端に臨み。

ツレ  
「さるにてもあの海にこそ沈まうずらぬ。

下歌地

「沈むべき身の心にや。涙の兼ねて浮ぶらん。

上歌

「西はと問へば月の入る。く。其方も見えず大方

の。春の夜や霞むらん。涙も共に曇るらん。乳

母泣くく取り付きて。此時の物思ひ。君一人に

限らず。思し召し止り給へと。御衣の袖に取り付

くを。振り切り海に入ると見て。老人も同じ満汐

の。底の水屑となりにけり。く。(中入)

ワキ歌

「此八軸の誓ひにて。く。一人も洩らさじの。方

便品を読誦する。

ワキ

「如我昔所願。

後ジテ

「今者已満足。

ワキ

「化一切衆生。

シテ

「皆令入仏道の。

地  
「通盛夫婦。御経に引かれて立ち帰る波の。

シテ

「あら有難の御法やな。

ワキ

「不思議やなさもなまめける御姿の。波に浮びて見

え給ふは。いかなる人にてましますぞ。

ツレ  
「名ばかりはまだ消え果てぬあだ波の。阿波の鳴門に沈み果てし。小宰相の局の幽靈なり。

ワキ  
「今一人は甲冑を帶し。兵具いみじく見え給ふは。いかなる人にてましますぞ。

シテ  
「是は生田の森の合戦に於て。名を天下に掲げ。武将たつし誉れを。越前の三位通盛。昔を語らん其為に。是まで顯はれ出でたるなり。

地サシ  
「そもそも此一の谷と申すに前は海。上は嶮しき鶴越。まことに鳥ならでは翔り難く獸も。足を立つべき地にあらず。

シテ  
「唯幾度も追手の陣を心もとなきぞとて。

地  
「宗徒の一門さし遣はさる。通盛も其隨一たりしが。忍んで我陣に帰り。小宰相の局に向ひ。

クセ  
「既に軍。明日にきはまりぬ。痛はしや御身は。通盛ならで此うちに。頼むべき人なし。我ともかく

もなるならば。都に帰り忘れずは。亡き跡とひて  
たび給へ。名残惜しみの御盃。通盛酌を取り。指  
す盃の宵の間も。転寐なりし睦言は。たとへば唐  
の。項羽高祖の攻を受け。数行虞氏が涙も。是  
にはいかで増さるべき。灯闇うして。月の光りに  
さし向ひ。語り慰む所に。

シテ「舍弟の能登の守。

地「早甲冑をよろひつゝ。通盛は何くにぞ。など遅な

はり給ふぞと。呼ばゝりし其声の。あら恥かしや  
能登の守。我弟といひながら。他人より猶恥かし  
や。暇申してさらばとて。行くも行かれぬ一の谷  
の。所から須磨の山の。後髪ぞ引かるゝ。

シテ詞「さる程に合戦も半なりしかば。但馬の守経政も早  
討たれぬと聞ゆ。

ワキ「さて薩摩の守忠度の果はいかに。

シテ「岡部の六弥太忠澄と組んで討たれしかば。あつぱ

れ通盛も名ある侍もがな。討死せんと待つ所に。  
すはあれを見よ好き敵に。

地  
「近江の国の住人に。く。木村の源五重章が。鞭  
を上げて駆け来る。通盛少しもさわがず。抜き設  
けたる太刀なれば。兜の真向ちやうと打ち。返す  
太刀にてさし違へ。共に修羅道の苦を受くる。憐  
みを垂れ給ひ。よく弔ひてたび給へ。

地  
「読誦の声を聞く時は。く。悪鬼心を和らげ。

忍辱慈悲の姿にて。菩薩もこゝに来迎す。成仏得  
脱の。身となり行くぞ有り難き。く。